

雜 錄

關係對象に就いて

務 臺 理 作

一つの對象が他の對象と結合して第三の對象を作る時、或場合には原對象より一層具體的となり他の場合には却つて抽象的となる如く思はれる。

例へば赤い色が圓と結合して出来る「赤い圓」と云ふ對象と、赤い色が他の色、例へば青色と結合して出来る「赤と青との相異」と云ふ如き對象とを比較すれば前者は二者の結合に由つて單なる赤よりもまた圓よりも一層具體的となり直觀的となつたのであるが、後者は二者の間の關係として單なる赤及青よりも一層抽象的であり非實在的である。即ち前者は結合することに由つて具體的となつた

のであるが後者はそのために却つて抽象的になつたと考へられる。共に二對象の結合でありながら斯の如き區別は如何にして生ずるのであらうか。

普通には前者は對象の構成に與かるるところのものでして對象的構成的結合であり種々なる關係の中に於て常に内容の獨立的自同性を維持するのであるが、後者は對象に何ものを加ふるところなく單に吾等の自由を以て對象相互を比較するところの主觀的反省的結合に過ぎない、前者は對象の間の實在的結合を規定するが後者は關係せしむる意識を豫想しそれに由つてまたそれに向つてのみ成

立するものに過ぎないのであつて、二者ひとしく結合と云ふにせよ意味するところが全然異なること云つてゐる。かく云へば普通の意味での對象と云ふ言葉は唯前者の結合にのみ適當するものでそれと同様な意味で後者も對象であるとは云はれぬであらう。前者のみが對象性を持ちものゝ存在に與かるが後者は對象ならぬ意識作用が對象を理解する一つの形式として *reiner Zusammenhang* を示すことなく單に意識の中に内在的に妥當するに過ぎないものを示すと考へられるであらう。然し二つの對象の間に成立する相異性フェルンランハイト（其他相等性グライヒカイト、相似性エーニリヒカイト等）の關係は全く對象性を持つことなきものであらうか。

嚴密に云へば二つの對象の間に成立する關係の中相異關係の如きものと大小、長短、前後の如きものとの間にも猶また對象性に關する區別が存する様に思はれる。相異關係は何處までも主觀的意

識が營む反省の所産として對象の構成に與かることがない、赤と青の相異するためにはそれに先立つて赤青の存在するを豫想しその表象を意識のうち結合比較するに由つて甫めて相異性を見出すのであつて、従つて相異性そのものが對象自身の屬性となることはないが、外接圓の面積が内接圓の面積より大きく其直徑が長いこと、また色のスペクトラムに於て赤より見れば赤が緑の前にあり青が緑の後にあることは夫 ぞれ對象の特有なる屬性であること考へられる。若しも多角の内接圓外接圓が共に結合して一の *Gesetz* を構成し、またスペクトラムが同じく一の *Gesetz* として存在すると見る時は大小長短前後の如き關係を離れてこれ等の *Gesetz* は考へられぬとも云ひ得るであらう。此様な意味でこれ等の關係は相異相似の關係に比すれば對象的であり構成的であると云ふことが出來やう。

然し例へ構成的であるにせよ、この等の關係は決してそれの項となるものより一層具體的であるとは云はれない。これ等の關係と赤い圓の如き對象とは猶次の様な見地から明かに區別せらるゝことと思ふ。大小、長短の如き關係は決して夫れ自らとして成立することが出来ない。甲のみでは未だ大であるとも小であるとも云ふことは出来ない。大小の關係の成立するためには必ず關係を支持する二つ以上の對象が豫想されねばならない。そして今甲が乙より大であり或は甲が乙の前にあると云ふならば、斯の如き關係は甲と乙とを豫想してのみ甫めて成立するものであり、その成立に於てや必ず甲乙の存在を俟たねばならぬものである。従つて甲乙は夫れ自身として各獨立的に考へられまた各獨立的に他の關係にも入り得るのであるが、かゝる關係は常に甲乙がその基礎フンダメントとなるべきを豫想する故に二者に依屬し二者に對して非獨立

的と云はねばならない。甲乙は存在するが（實在對象であるならば）その間の關係は同様な意味で存在することは出来ない（スペクトラムの順序自身は赤くもなく青くもない）、また同様な意味で成立することも出来ない（内接圓と外接圓の關係は圓くもなく大ききもない）。即ち甲乙の結合に由つて成り立つものでありながら甲乙に比すれば却つて抽象的非直觀的であると云ふことが出来る。然るに「赤い圓」の場合に於ては結合せるものが夫れ自身として考へられまた獨立して如何なる關係にも入り得るのみならず已に述べたる如く單なる赤い圓に比して一層具體的であり直觀的であると云ふことが出来る。斯の如く二者は夫れぞれ結合體コムプレックスと考へられながら一は一層抽象的に他は一層具體的となるのであるが、それにも係はらずいづれも對象的であると思はれる。

然らばかゝる對象より區別せられ何處までも意

識に於ての比較反省の結果に過ぎないと考へらるゝ一群のもの、即ち相異性相似性或は相等性の如き關係は眞に對象性を持つことのないものであらうか、私はその代表として特に相異關係を考察して見やう。赤と青と云ふ二つの色の間に相異性のあることは誰しも認めざるを得ない。けれども此相異は赤及び青の構成的要素をなすものでなく、また赤と青が他の要素と結合して構成する Gestalt (例へば青い海に見ゆる赤い船の如き)の一要素となることもない。此點で確かに時空の秩序に屬し従つて時空の許に規定せらるゝ Gestalt の特性に屬する大小、長短、前後の如き關係と區別せらるゝ様に思ふ。然しこれ等の關係が對象の構成に與かるものならば更に進んで相異相似の關係もまた對象的特性を持つことあるを明にし得ぬであらうか。

勿論比較反省することが單に概念の分析綜合を

企圖するに過ぎずしてそれに相應すべき對象の實質に無關係であると考へる限り上のごとき疑問は極めて意味なきものであらう。また反省を以て認識の範圍を擴張するものでなく單に認識を深化するに過ぎないと見る立場よりもそれを以て對象的と考へるのは徒らに「デンクリヒツンク思惟の方向」を混同するものと云はるゝであらう。赤と青との相異が赤くなく青くなく甲と乙との區別が二者の部分でなく全體でもない事を思へば、それを以て對象的と考へんとするは餘りに明白な謬りであるかも知れない。然しかくの如く考へ來るならば當然 Gestalt の構成にあづかる諸關係もまた反省の所産たる主觀的概念に過ぎぬものとして非對象的と云はねばならぬであらう。何故と云へば大小長短前後等の關係は關係であるがためにそれに先立つて完成せられたる要素を豫想し、それに由つて支持せらるゝに過ぎないからである。即ちこの立場より見れば

關係は常に主觀的非實在的であり項のみが對象的實在的なるものとして關係に對する優越性を持つと云はねばならない。

然し乍ら所謂實在對象と稱するものは一切の關係の外に超然として孤立するものでなくそれも本質的なる諸關係の結合點として、斯の如き結合點をその裡に包含する綜合的全體的關係の中に於てのみ(カントの所謂 *Synthesis* ヘーゲルの *Einzelne* に於てのみ)實在對象た得ることも餘りに明白である。時間空間實體因果の關係は實在對象を構成する本質的要素として夫れぞれ構成的であると云はねばならぬ。然らば時空因果の關係と大小、長短、前後の如きものと如何なる點に於て異なるであらうか。恰かも實在對象を維持する綜合的全體的關係が時空因果の單一關係に還元し能はざる何ものかをその核心とする如く時空因果の關係はまた抽象的なる單一關係に還元し能はざる何もの

かを核心とし、かく核心を維持することのために構成的關係が反省的關係より峻別せられると云はねばならぬかも知れぬ。然し私たちは絶對にその中に核心を包まぬ様な純粹なる單一關係と云ふものに到達出来るであらうか。若しかくの如きものが存するならば、それこそ絶對に對象の構成に與かることなきものであらう。けれども一の關係が成立すると云ふことは無限の關係との交叉に於てのみ可能であり徒つて如何なる關係も更なる他の關係を豫想すべく、かくして當然他の關係に還元し得ざる構成的契機を自らの中に含まねばならない。大小長短前後等の關係に於てもかゝる契機を缺くことなく、若しそれを失ふとせばもはや關係たるの職能を果し能はぬことになるであらう。對象と呼び得るものはひとり實在對象のみでなく恰かも所謂對象論者が考へる如く一切の *Soscin* に於て考へらるゝものを正しき意味で對象と呼ぶべ

きであり、その限り一切の關係は自ら一の對象であると共にまた他の對象の構成に與かり得るの權能あることを認めねばならない。

然し此考へに對しては次の點より論難が向けられると思ふ。一の關係の核心となるものが、その要素の關係に還元出來ぬと云ふ意味は必ずしも一義的でない。例へば赤と青との相異關係は單獨的なる赤にもまた青にも、從つて獨立的なる赤青が存在するために豫想せねばならない一切の關係にも還元出來ぬ高次的のものと云ひ得ると共に、また反對に赤青が包含する一切の關係の結合點の全體として、赤青を内面より規定するものは、赤青の一面的抽象たる相異關係には還元し能はざる高次的のものであるとも考へられる。若し前の意味ならばたとへ他に還元出來ぬ或者を含むにしてもそれは構成的契機となるものでなく却つて二つの項を意識内容として任意的自由的に綜合統一した

る主觀の所産に過ぎないと云はれるであらう。これに反して後の意味ならば其核心となるものこそ主觀の任意的結合作用を超越したる内容自身の獨立を支持する爲の具體者 (das Konkretum) でありその者のみを構成的要素と呼ぶことが出來やう。而して上述すべての關係が對象性を持ち得ると云ふ事の根據に萬一前者の意味を誘入して居るものとせば頗る曖昧な論旨であると云はねばならぬ。即ち同一の内容が異なる關係に現はれ同一の關係が異なる内容の間に成り立つと云ふ様に、項と關係とを相互獨立的に移動し得るものと考へる立場より、與へられたる内容を自由に結合することゝかゝる結合に由つて何等變更を蒙むるとなく單に外面的に繰返さるゝに過ぎない同一内容を峻別する時は、甲と乙との相異關係に於て甲と乙が意識内容として結合するために甲乙各々に歸入し能はざる特色が表はれても、この特色は甲乙に由

つてのみ維持せられ基礎附けらるゝところのものとして常に甲乙と同様な實在性を要求し得ないのみならず如何なる意味に於ても實在し能はぬものと考へられる。對象論者の所謂高次の對象はたゞへ要素に還元し能はざる特色を持つにしても、それは常に對象の間の實在的關係たり能はぬと従つて構成的關係たり能はぬとは明らかである。即ち私たちは私たちの意識に於て自由に綜合したる關係と、かゝる關係の中に於て常に同一内容として繰返され自由的結合の全く興かり能はぬ對象の間の實在的關係とを無視することは許されない。かく考へ到ればすべての關係が他に還元し能はざる核心を含むがために、たゞそのとのためにそれ／＼構成的契機を藏し従つて對象的であると云はんとするは餘りに早計に失するものとも考へられる。然し乍ら猶私は問ひたいと思ふ、反省的構成的二關係の區別は單に自由的結合であると然らざると

の點に由つて左様に嚴密に示さるゝものであらうか、赤い圓は赤にもまた圓にも遂に還元し能はざる綜合的統一を含むと同様に赤と青との「相異」は赤にも青にも歸入し能はざる新しき性質を含むのであるが、此二者を以て一は自由的結合のために他は然らざるための根據に基いて區別し得ると云ふ所以が常に左様に判明であり得るだらうか。赤と青との相異關係は自由的結合であると云ふは如何なる意味であるか。赤と青とが相異することは對象論者の云ふが如く單にかくの如く相異するのみならず必然的にかくの如く相異せねばならぬのであつて、其處に所謂高次の對象としての關係性が常に時間を超えて永遠的に成立するの特色が見出される。7と5とが相異するのは吾々が自由に任意に定めるのではなく永遠に向つて必然的にかくあらねばならぬのである。それ故相異關係が自由的結合であると云ふのは前者が決して自由に

成立すると云ふのでなく、一の項と他の項とが意識の中に比較せらるゝ事のみ自由であるの義、即ち赤と青、赤と黄の孰れを比較するか、全く主觀的意志の自由に屬するの義でなければならぬ。然し一度一の項と他の項とが定めらるゝや其處に成立する相異性は全く必然的でありその必然性は各の項が背後に豫想する *Sossein* の全體より基礎付けらるゝものであつて主觀はこれに一指を染めるとも出來ぬと考へられる。更に仔細に觀察すれば二つの項を結合することが全く自由であると云ふ義も極めて不明であつて、本來的に何の關係なき二つの對象を全く任意的に結合すると云ふのは無意義な事である。赤と道德、コンゴ一人と超限數を比較して二者の間の相異を見んとするは單に任意的と云ふより外に何等の意義を持つてゐない。若しも赤と道德を全く偶然的な名目的に結合して「赤い道德」と呼ぶ對象を作りまた圓と四角を同様に

結合して「圓い四角」を構成すると全く同一の關係の許に「赤い花」や「奈翁の帽子」が成り立つと云ふならば、單なる名目的結合と主觀に對して直觀の抗束性現實性を要求する對象本來の結合とを餘りに混同するものと云はれる如く、赤と青との相異と赤と道德との相異が全く同じ關係の許に成り立つと云ふならば餘りに項と關係との内面的結合を無視するものであらう。赤と道德とは勿論絶對に關係出來ぬものではない。然し赤と道德の相異するより赤と青の相異がパウロとロマ人の相異よりパウロとペテロの相異が、一層深く一層必然的であることは、二つの項の結合が全く自由であるための結果でなく、かく二つの項を結合するに當つて當然顧みねばならない對象の抗束性に基くのである。赤は赤であるがために限りなき對象の中より色の緑を要求し緑に於て色の反對性を見出して己れに還る。この關係が全く同一的に赤と黄の間

に成り立つものとは思はれない、況して赤と道德の如き單に論理的思惟一般の對象として關係するに過ぎないものゝ間にこれを求めんとは望むべくもない。赤が他の對象と眞に相異するためにはかくの如き對象として「必ず」色をとるべきであり色の中でも黄より青を選むべきである。由來一つの對象が對象として成り立つためには無限の對象との關係を豫想せねばならないことに由つて無限の對象との間に相異關係を持ち得ることは明かであるがその内容は一々必然的に相異すべきであり、しかもその中に於て或る特定のものゝみに對して眞に相異すると云はねばならない。かくの如き對象自身の特性に基いて、相異關係が種々なる程度に成立すると見る時は、一の表象内容と他のそれとを單に偶然的自由的に結合することに由つて決して純粹なる相異關係を見出し得ぬことは明かであり、従つて比較結合の場合に於て對象の本來的

なる要求を無視し能はぬを特に知らねばならないと思ふ。以上の如く考へ來れば二つの對象を比較するに當つて、主觀の綜合作用が全く自由であると思はれぬは勿論であり、従つて相異關係の結合が自由であるがために構成的關係たり能はぬと云ふのは必ずしも判明でないと思はれる。

然し乍らまた一面より考ふればかく意識内容を比較反省することがたとへ對象の特性に基くにせよひとり意識に由つてのみ且意識に對してのみ可能であることが明かであり、従つてかゝる比較の關係の中に取入れられ繰返さるゝに過ぎない對象の實在的關係より區別せねばならないこと、即ち意識に於てのみ存在し對象に向つてのみ妥當する所のものと、それとは獨立的に如何なる關係の中にも入り行き且常に實質的自同性を維持する處のものとの區別は決して混同し能はぬことを忘れてはならない。簡単に云へば已に述べたる如く項に

對する關係の非獨立性非實在性と關係に對する項の獨立性實在性を無視して二者を同種のものとする事は出來ないと思ふ。従つて相異相等の關係と對象的實在的關係とを俄かに同列せしむることは無謀の舉に屬するものと云はねばならない。

然しながら遂に二者は根本的に對立せねばならぬのであらうか。相異相等の關係は遂に對象性を持ち能はぬものであらうか。私はそれを疑はざるを得ない。

この疑問を明かにするためにやゝ精細に相異性の本質を吟味して見たいと思ふ。

元來相異性は如何にして成立するであらうか。

これを心理的に考へて例へば比較判斷、表象結合又は感覺に伴ふ識別作用に基けて第六感 *sixth sense* にこれを求むるとしても、或はその根元を腦皮質に於ける生理的過程に見んとし更には外界刺戟の結合的關係に求めんとしても普通の經

驗的心理學に於ての如く原因結果の關係の中に實在的に成り立つ作用を考へ、その所産に過ぎないとするやうな考へでは充分その根據を明かにするを得ないであらう。何故と云へばかやうに時間の中に相異關係が一の表象結合として産出せらる

ゝと云ふためには従つて經驗的意識の中に成立すると云ふためには因果關係の根本に於て或は廣く經驗そのものゝ成立する基礎に於て、已に相異關係を豫想せねばならないからである。相異關係の最も原始的なる姿に就いて私たちはそれを區別關係と呼ぶのであるが、如何なる實體も他の實體と何等かの關係を現實的に持つ時その根元として必ず一つの區別關係を豫想せねばならない（同時に自同性を豫想するは勿論である）。かゝる區別の關係ありその上に甫めて經驗が成立するのであつて經驗に由つて區別が成り立つのではないことは明らかであると思ふ。經驗的心理學が若しも因果的實

在的作用の中にその所産としての相異關係を見んとするならば、それは Hysterion Proterion に陥る外はない。それ故相異關係が意識に於ての主觀的結合關係に過ぎないことが正しいとしても結合作用 (combinierende Tätigkeit) は決して經驗的意識作用の意味であつてはならない筈である。かやうにして私たちは先驗的な立場に還つて區別相異の關係の如何なるものであるかを考察せざるを得なくなるであらう。

A と云ふ對象が成立するために必然的に A に對して A ならざるもの即ち「他」に屬するものを考へざるを得ない。A と A ならざる他とは互に區別されたるものとして單に相對的に他の否定であるのみならず同時に他に非るものとし、積極的に自身でなければならぬ。例へば赤と青を區別するならば私たちは青へ關係することに由つて青ならざるものとして赤を定むるのであるがかくする

ことは同時に逆に青を赤へ關係せしむることに由つて赤が再び赤自身へ還らねばならない。かくして赤が赤として成り立つのである。かくの如き二つのモメント即ち Nicht-Blausein/Rotsein とが唯一の作用に於て唯一のものとして成り立つ時それが區別作用に外ならないと思ふ。それ故 A と他とを區別することは半面に於て A が A である爲の根源であり、A が A であることは又他面に於て A が A ならざる他を介して自らに還ることの理由となる。それ故區別することは必然的に A と他ならざるものとしての A との分離であるが同時に A を A として二者を結合することである。結合は分離を豫想し分離は結合を豫想する即ち二者の間に唯一の綜合的根元的關係作用 (Beziehen) あるのみである。區別するのは關係することである。この立場より見れば單に區別が區別として自同性を持つこと以上に區別に由つて關係する事の、かくして

區別に由つて豫想せらるゝ積極的自同性そのもの半面に區別が與からねばならない。自同性と區別性はいづれが特に對象的であり意識的であるかを別にするこゝとなく唯一なるものゝ積極的消極的兩モメントの相異に過ぎない。一方は孰れも他を豫想し本來的にはいづれが根元であるとも定められぬ。若しAは客觀的對象であるが、Aが自らに reflectieren することは意識の中に於て意識に向つてのみ成り立つ主觀的モメントたるを免がれないと云ふならば、同時に私はかゝる反省作用に由つてのみAを綜合的統一に於て直觀すること、従つてAの現實性獨立性を維持することを主張するであらう。或はまたかくの如く限定して考へらるゝAの自同性と對象的實在的自同性とが區別されねばならぬ、前者は後者に依存するが後者は前者より獨立すると云ふならば、かくの如き原始的對象に就いて考察せらるゝ限りかゝる區別の意味なき

ことを主張するであらう。即ちAが論理的對象として成り立つたためには他の區別關係は必要缺くべからざるものであり、かくして關係が對象の論理的構成に與かることは明かである、此場合反省は直ちに對象の構成作用である。この考へを上述の相異關係は對象性を持つや否やの問題に於て顧みる時、私は直ちに當然の歸結を見出す事が出来る、即ち相異關係がその純粹なる姿に於て内面的區別作用に還る時は對象の構成に與かる事を當然認めねばならない。對象があつて相異關係が成り立つのでなく相異關係に由つて對象が眞に統一せられたる、従つて直觀的なる對象となり得るのである。若し相異關係を以て經驗的意識の中に甫めて成り立つものとすればそれに先立つて對象の自同性客觀性を確立することが必要であり、かくの如き對象の一と他とを比較抽象するより要求せらるゝ相異性であるならばそれはもはや對象自身

に何ものを加ふる處なく單に一と他との外面的關係に過ぎぬであらう。ものは夫れ自體としては同一であるがこれを他と比較して甫めて差異が成り立つと考へる限り他との相異は夫れ自體にとつて何の必要なきものとなるであらう。然し上述せる如く自同性そのもの、成り立つ根元に於て已に相異性の與かることを認むるならば後者はもはや前者の外面的關係ではなく夫れ自體の存在するため、當然含まねばならない本質的モメントと考へられる。かくして相異性の對象性を持ち得ることが、理の當然に従つて主張し得られるであらう。

然し乍ら私たちはまた他方に於てかくの如き相異性に由つて成り立つ對象が如何なる種類のものであるかを顧みねばならない。上に述べたる區別作用が純粹思惟の作用を意味する限り、かくして成り立つ對象は論理的思惟の對象たるより以上のものであり能はぬは明かである。輝く色としての

赤や青が直觀的實在的對象として成り立つためには、論理的思惟一般の對象を内面より構成する相異關係のみに還元し能はざる或ものあつてこれに加はると考へねばならぬ。色と道德との相異に由つて色や道德の成り立つ筈はない。それに由つて成り立つものは單に論理的思惟一般の對象として考へらるゝ一と他の關係に過ぎない。抽象的な論理的思惟に於ては赤と青の相異も赤と音の相異もまた赤と道德の相異もひとしく相異關係 (verschieden sein) として同一次元に屬すべくこれより輝く赤や青の本質を導き出し能はざるは餘りに明かである。即ち上の如き區別關係従つて相異關係の基礎附け得るものは純粹なる論理的思惟の範圍に留まる對象に過ぎない。そしてその限りに於いて常に必然的に相異關係は原始的思惟作用として對象を *setzen* し得ること、反對に對象より *begründen* せられ對象に由つて維持せらるゝに非

ることを云ひ得ると思ふ。

然らば相異關係は單に論理的思惟一般の對象を setzen することのみに留まつて絶對に「輝く」赤や青がかくの如き赤や青として成り立つ基礎に與かり能はぬものであらうか。勿論對象は輝くが對象の表象は輝かぬと云ふごとき立場より見れば若し相異關係にして輝く色の成立にも與かるものと云ふ時は概念を實體化するの獨斷に陥るものと難せられるであらう。けれ共私が上に赤と青の相異と赤と道德の如きものとの相異はたとへ verschieden sein と云ふ形については同一であるにせよ、そして其點のみを考察する論理的思惟の立場に於ては同次元に屬するにせよ、その内面的關係に於て深淺の區別がなければならぬと云つた考へを此處に再び繰返すならば、二者が相異すると云ふことの意味は決して一義的でなく従つてそれが *objektiv* する對象の本質も決して一義的ではあり得ぬ筈であ

る。それ故原始的思惟作用としての區別關係は單に一と他との關係に由つて對立する對象を構成するに留まるのであるが、若しも相異關係にしてそれのみに歸入し能はざる新しき意味を自らからに導入するならば、その理に應じて新しき内容を本質とする對象を setzen すると云ひ能はぬであらうか。

嚴密に考ふれば赤と青、赤と音、赤と道德の相異の如き三つの關係は孰れも一と他の相異であるより以上の意味を要求し能はぬであらう。何となれば verschieden sein と云ふ *Objectiv* の意味する處は全く同一であるからである。然し私は上の三つの相異關係は單なる verschieden sein と云ふ *Objectiv* のみに還元出來ぬ各々の特色を藏することと思ふ。赤と青は視覺對象としての相異であつて、かくの如く相異する本質は赤と音の相異する次元に還元し能はぬものであり、同様に赤と音の

相異は感覺對象としての相異であつて、その本質は赤と道德とが關係する次元に還元し能はざるものである。夫々は全く異なる次元に於ての相異であり次元は一般的より特殊的に連續的に、然し Grund を以つてしては移り能はざる本質的區別を藏しつゝ排列されてゐる。赤と道德との相異と赤と青との相異の孰れが大であるかは程度に由つて語ることが出来ない、ひとり次元の相異に由つてのみ知り得べきである。かく二つの對象が相異すると云ふのは二つの對象の屬し得る次元に於ての相異であり、従つて最も抽象的一般的なるオブジェクト *verschieden sein* の意味するところに還元し能はざるの特色が夫々の相異關係に藏せらるゝは明かである。私は次元に示さるゝこの區別を嚴密に維持することが相異關係の本質を明かにするの要機であると信じてゐる。この區別を混同するがために多くの人々は論理的思惟對象の相異關係

が色としての赤や青の構成に與かり能はぬ所以を以つて、一般に相異關係は主觀的思惟の所産にして對象の構成に與かることはない云ふではなからうか。確かに論的思惟對象の相異關係が視覺對象としての色の構成を規定することないは明かである。色の存在は思惟對象にとりて單に偶然的事實に過ぎないと同様に色にとつてもかくの如き相異關係は外面的結合に過ぎぬと考へられるであらう。然し若し論理的思惟對象としての相異關係が必然的にその次元に於ての項を *setzen* し構成することの寧ろ當然なるを、そして視覺對象としての色をしかし能はざるの極めて明白なるを知るべきならば、同時に私たちは視覺對象相互の相異關係従つて區別關係が、その次元に於ての項であるべき視覺對象そのものを *setzen* し構成し得ることの當然なるを考へ得るに到ること、思ふ。このことを一層明かにするために色相互の間に於ける相

異關係を分析して見やう。

色に就ては色自ら獨立せるものとして思惟より導かれざる不合理的の體系として考へらるゝと共に亦物の一現象一性質として思惟より *beginnen* せらるゝものとも考へられる。今壹ぱら前者に就て考察せば對象論者が極めて精細に分析したる如く赤と他の色との相異關係に於て *Verschiedensein* (*Soseinsubjektiv*) と、その基礎となるべき *das Verschieden* とが區別出来る。例へば色のスペクトラムに従つて赤と他の色とを比較する際或る方向については漸次相異の大きさを増加し縁に於て最大となり他の方向については次第にそれを減少し赤自身に到るに及んで零となること明かであるがかく *Grad* を持つと考へらるゝ相異が後者を意味しかる *Grad* の差を有するにも係はらず零に到達せざる間は常に *verschieden sein* として *gleich sein* に對當する同一意味を維持するものが前者で

ある。即ち „Relation“ としての *Verschiedenheit* がオブエクティブ *Verschiedensein* を意味する限りそれは程度や大きさに由つて考へらるゝ事なく一點に於いて肯定乃至否定せらるべきものである。これに反して „Relat“ としての *das Verschieden* は性質的強度的 *Kontinuum* の一限點に於て常に成り立ち、從て連續的の大きさに由つて一より他に移り行くものと考へられる。かくの如き „Relat“ の特色は色の相異が成立する次元の本質をなすものであつて „Relation“ としてのオブエクティブ從て論理的思惟一般の關係には還元し能はざるどころのものである。即ち色の相異關係をその一面的抽象たる論理的思惟の關係に還元せんとする時遂に還元し盡す能はざるものが此處に *Kontinuum* の形に由つて現はるのである。色に於ての相異關係は一と他の相違關係より内容に於て豊富である、その中には後者に見る能はざる具體的なる

Kontinuum を含んでゐる。この Kontinuum が純性質的抽象的なる Verschiedensein に由つて *Abstraktionen* せらるゝ能はざるは明かである、却つて後者がその一面的抽象と見らるゝ限り多くの人々に由つて *Realität* の優越性の主張せらるゝはもつともな次第である。而して色の相異關係に含まるゝ此 Kontinuum と色そのものゝ有する Kontinuum と如何に關係するであらうか。

二者は次の點に就いて全く同一である。第一に色の連續は例へば色調の方向に就いて考へるならば、一の色が他の無限の色との關係を全體として背後に擔ふことに由つて、無限の色に於て無限の關係が無限に交叉點を持つこととなり、かくの如き點の一々が集合して色の連續をなすものと考へられる。即ち色の連續に於ては如何なる要素に於てもその背後に色の全體的關係が豫想せらるゝと共に、一と他とは性質的にそれゝ異なるものと

してしかも程度的に一より他へ推移することが出来る。かくの如き全體的關係と極めて程度的なる推移關係とを離れて、もはや如何なる色も色として成り立つことは不可能である。色が與へられてかくの如き關係が成り立つのでなく後者に基礎附けられて甫めて前者は色となるのである。この理に由つて赤と青との相異を考へるならば二者がかく相異することは色全體の關係の限定として色の連續の中に含まれねばならない。而て赤が青のみならず無限の色と相異しそれゝ異なる Grad の見出さるゝことはすべて色の連續の無限の限定點に於て見出されねばならない。即ち色の要素の集合するだけそれだけ相異の Grad が區別さるべきである。色の推移は Grad の推移と相應ししかも失はれざる全體的關係は Grad の全體を内容とする Verschiedenheitsrelation に相應する。即ち二つの Kontinuum は所謂濃度を全く同じうするも

のと思はれる。第二に色の連續に於て限定せられたる一の色は他の色をその部分とすることなくまた他の色の部分として他の色に含まるゝこともない。紫は赤と青との混色と云ふのであるが紫の中に赤と青を見ることがなければまた單なる赤と青に紫を求むることも出来ない。一の色は他の色の和となる事なくまた他の色の差になることはない。即ち色の連續に於ての一々の點は他の點に分解出來ざる全體的事物、部分を含まざる單一的事物と云ふ事が出来る。同様に、das Verschiedenの持つ Grad も他に分解するを許されざる單一的事物である。例へば赤と黄との相異は赤と青の相異よりも小さいが然しそれ故に他の相異の度と結合することに由つて後者の度に到達するとは考へられぬ。後者の度は前者と他のものゝ和ではない。一の色と他一色との相異は他端の項が色の連續に由つて推移するに伴れ一々性質的に區別せら

るゝものであつて、一を以つて他に歸することが出来ない。即ち共に unteilbar なる點に於て二つの Kontinuum は同一である。第三に已に述べたる如く das Verschieden は Verschiedensein に還元する能はざる具體的區別を自らの中に藏する如く、色の連續は單なる Sosein 例へば hell sein, seintüft sein に還元し能はざる具體的統一を自らの中に含むと考へられる。即ち二者共にそれの一面的抽象たる一般關係には還元能はざる構成的契機を藏する點で同一である。以上は極めて概略的な比較であるがそれに由つて私たちは色の連續と色の相異の連續とはまさしく一々の相應を持つものと思ひ得るのである。然し他面より考ふれば二者はそれにも係はらず本質的に相異するものと思はれる、第一に色の連續は見る事が出來かくして直觀せらるゝが色の相異の連續は見る事が出來ない。色の連續の限定點は赤、青と云ふ如き

夫れぞれの色であるが、赤と青の「相異」は赤でもなく青でもなくその單なる和でもなく、またそれ等と相並ぶ第三の色でもなくて、それ等に對する「高次の對象」と考へられる。第二に色の連續は大きな (Grösse) を持たないが相異は大小に於ての Grad を持つ、前者は純粹に性質的であるが後者は性質的「量」に於ての連續であると思はれる。

然しかくの如き二者の差別は次の如き考察に由つて否定せられる。第一、二者は直觀的非直觀的なる點で異なること云ふのであるが、嘗て私の考へた様に「赤い花」の直觀に於て赤い花の存在が知覺せらるゝのみならず「赤くある」と云ふオブエクトフ (Sosein) が同時に知覺されねばならぬと云ふ立場より見れば、赤と青とが共に知覺對象として與へられる限り赤を知覺すると共に「青より相異する」と云ふオブエクトフもまた知覺せらるゝものと思ふ。私たちは赤と青とを直觀するのみなら

ず二者が色に於て相異することを必ず共に直觀する。若し前者のみ直觀せられ後者の直觀せらるゝことがないと云ふならば、たとへ個々の色は直觀せられても色の Kontinuum は直觀せられないと云はねばならぬであらう。然し色の Kontinuum が個々の色をその中に含むものとして個々の色と共に直觀せらるゝならば (例へば色のスペクトラムが知覺せらるゝ場合の如く) 同時にすべての色の關係が直觀せらるべきであり、色の無限の相異も當然直觀せられねばならない筈である。即ち色の連續が直觀せらるゝならば同時に色の相異の連續も直觀せられねばならない。次に第二の差別に就て、赤や青は夫れ自身 (Rosein, Blausein) としては決して大きさを持つとは云はれぬが然し色全體の關係を背後に担ふ時全體より限定せられて色の連續の中に於ての性質的位置を持つことになる。かくの如く限定せられたる性質的位置と相異に現は

るゝ限定的程度とはまさしく相應するものであるが、かく相應し得る所以のものは一々の色が色全體の關係より孤立することなく全體の順序に従つて配列せらるゝためであり、此全體の順序とは性質的區別に基く相異相似の大きさの順序とまさしく同一でなければならぬ。勿論色の性質的位置は大きさを持たない、一々が性質的に異なるものとして他に對することが出来る。然し色の連續に於て夫々の色が定められたる位置に於かれ全體よりの順序に支配せらるゝ所以のものは、一の色の他の無限なる色に對する相異關係がその大きさに従つて連續的に推移する様に限定せらるゝと云ふより外の意味ではあり得ない。色圏は、それに於て對當する二つの色が他の如何なる色に向つてよりも、最も高き對比の度を持つ様に、すべての色を配列すると云ふ意味は、かく對當する二つの色がそれに於て最も相異の度を著るしくするやうにせ

られてあると云ふより餘の義ではあり得ない。即ち色の相異の大きさは色圏に於ける性質的位置の由つて定まる所以であり、一方より見れば相異の度は色圏の位置に相應すると共に他方より見れば色圏の順序従つて色の連續の方向する所は相異の大きさに基づくものと思はれる。

かく色の連續と色の相異の連續とが根本に於て同一のものど考へらるゝ時は、それに由つて相異關係とそれの項との結合に關する新しき意味が展開せられる。論理的思惟一般の次元に於ては相異關係は直ちに區別作用としてその項たる一と他を却つて *setzen* し構成したのであつた。區別するのとは關係するのであつた。分離するのは結合するのであつた。區別と自同は根元的の一者の離すべからざる兩面なのであつた。この思想を色の相異及びそれに含まるゝ連續の意味と結合して考へる時は私は正しく次の歸結に到達出来るものと信ず

る。一の色²の他の無限なる色²の *Verschiedensein* は單に論理的思惟に於て一と他を區別するより以

上の意味を持ち能はぬとしても、その *Phase* に は還元出來ぬ *das Verschieden* 即ち „*Relat*“ としての連續を内容として其中に含む時は、此處に成り立つ相異關係は論理的區別作用には還元出來ぬ新しき力に由つてその項たる夫々の色を限定し構成することが可能であると思ふ。論理的思惟の區別作用に對し色の相異の根元たる區別作用は直ちに色の純粹識別かくして純粹視覺の作用とならねばならない。如何なる色も色の綜合的全體的關係の外に超然として孤立することなくそれに於てのみ甫めて色となり得るならば、如何なる色もかくの如き關係より限定せられそれに由つて構成せらるゝと云はねばならぬ。而してかくの如き關係が他面より見て色の區別作用に外ならぬならば（自同の他面は區別である）色の相異關係はその純

粹の姿に於て色の綜合關係と一致すべく色は相異に由つて色となる。

以上の如き私の主張に對しては一方よりは主觀的概念を實在化して存在對象とするものであると云はれ他方よりは關係對象を主觀化して意識作用とするものと難せられるであらう。この批難に對して明快なる解答を與へるためには上述所論の路すぢは餘りに簡單に過ぎるかも知れない。然し私は所謂存在對象がすべて綜合的關係の中にある限り、かゝる綜合的統一の核心となるべき自同者が自らに翻つて眞の意味で反省する時反省は直ちに構成となり區別は直ちに綜合となり純粹なる意識作用と對象的自同とは直ちに一致せねばならないと思ふ。そは已に論理的思惟一般の立場に於て闡めたることの演繹に外ならないと信ずる。

相異關係は斯の如く對象の成立を内面より基礎附ける。純粹なる區別作用とは已に完成せられた

る對象のひと他とを再び意識に繰返して結合分離することなく、對象自らが對象として成立つために自らの根元に還つて自らを begründen するの謂である。それは眞に主觀的であるがために眞に客觀的なる對象を構成する。區別關係相異關係（相似相等と共に）を離れそれを豫想することなくして如何なる對象も成立つを得ざるは私の特に繰返す迄もなくすぐれたる論理學者の已に説かれしところである。

それにも係はらず本論の出發點に疑問とした様な相異關係は一般に抽象的非直觀的であり、それに對して赤い圓とか赤い花とか云ふ如き結合が一般に具體的直觀的と考へらるゝは何故であらうか相異關係を上如く純粹に考ふる限りそれは決して抽象的非直觀的と云ふべきでなく却つて具體者（das Konkrete）自體の表現とも見るべきものである。すべての直觀の根元に働く識別作用の表現

である。赤い圓、赤い花の直觀に於いて同時に「赤くある」と云ふ *Sowasieobjektiv* が直觀せらるゝならば、その根元に色全體の關係に於て一切の色より赤自らを識別する反省作用が豫想されねばならない、それを表現せるものが色の相異關係である。それにも係はらず「赤き圓」「赤き花」のみを直觀的とし色の相異を非直觀的と考ふるのは何故であらうか。思ふに此區別は相異關係を以て已に成立したる對象を意識に於て一面的に抽象結合したるものと考へ關係は項に依存するが項は關係より獨立すると見ることの歸結であらう。然し上述せる如く關係は夫々の次元を持ち一の次元に於ての關係と項とが必然的に結合するものであるならば項が關係より獨立的であると云ふは同次元に於ての二者に許されぬことである。にも係はらず項が關係より獨立することが何の不思議もなく寧ろ當然の事として考へらるゝのは、多くの場合に於て

項となる對象がそれより具體的なる次元に屬する關係の結合點として、一方に於てはこれを包含する全體的關係の中に見られ他方に於てはこれより抽象せる關係の支持點として見らるゝために次元の撞着を起しその結果具體的結合に於てのものが抽象的關係に對して獨立的となるのである。例へば赤が他のものとの關係より獨立すると云ふことは色調光度飽和度の如き色一切の關係の結合點として兼ねてそれ等の綜合的具體的統一たる色一般の限定點としての赤が、赤に向つて限定することなく却つて赤自らの「面的抽象に過ぎざる他の關係に臨む時、赤を限定する das Konkretum」の持つ優越性の中に赤自身が包含せらるゝの立場よりして、それ等の關係より獨立することが出来ること考へられるのである。かく項が關係より獨立すると見る時はもはや二者は同一次元に屬することなく、二者に次元の區別が成り立ち關係は「高次的」

のものとなる。この立場を最も明瞭に示せるものが所謂對象論を主張する人々であらうと思ふ。然し關係が純粹であるならばそして das Konkretum の直接なる表現であるならば、私は項も關係も同一次元にあるべきであり項は關係の切斷點として寧ろ項に對する關係の優越性が高調せらるべきであると信ずる。何故となれば、已に一つの對象が本質的必然的なる關係の結合點としてあるより外に對象の正しき見方が許されぬならば、かくの如き結合點をその切斷點として包含する綜合的統一の立場よりすべての關係の具體化が行はれ、それ〴〵の關係の項となるものは關係自らの限定であるより他には考へられぬからである。若しも一方に於ては對象論者の如く關係はすべて項に由つて支持せられ基礎附けられるゝ考へつゝ然かも他方に於てすべての對象は種々なる關係の項となつてその關係を fundieren するために純粹對象とし

ての Sosein より構成せらるゝと云ふならば、當に如何なる原理に従つて抽象的なる Sosein が、その結合點の全體としての das Kon- return の中に包含せられ、かくして實在的關係となり得るか不明であるのみならず、また他面に於て、關係を支持する項が項に本來的なる Sosein に還元せられ、しかも Sosein は一の關係の表現であるがためにその基礎として更に新らしき項を要求すべく、此項は更に關係 Sosein を要求し關係は兩び支持點としての項を要求し、かくして際限なく Ietio pincipii に陥る外はないであらう。此逆理を超越するためには先づ關係の優越性に由つて selbständiger Ausgangspunkt を確立するにある。

勿論此處に云ふ關係は心理主義の立場より考へる抽象的一般としての關係でなく具體的統一に於ての關係即ち die ursprüngliche synthetische Einheit des Bewusstseins の見るところの、純粹なる關係の apperzeptive Beziehung, Tentieren, Ver-segenwärtigen des Nichtgegenwärtigen に外ならぬ

い。關係を特に抽象無力と考へるのは上述せる如く具體的綜合的立場に於いての項を移して以て一面的限定に屬する關係の項とするためであり、多くの場合に於て實在對象は他の關係より綜合的具體的なる結合に屬し、従つて他の關係は常にこれの一面的限定と見らるゝために抽象的となり従つて「高次の對象」と考へられるであらう。甲と乙との關係が眞に抽象であり項にとつて外面的であるならば、斯の如きオブエクチフを内容とする思惟に於て、何故なれば直觀的「完結的」なるオブエクト（赤い圓赤い花の如き）を内容とする表象の示し能はざる意識作用の能働性が現はるゝかは遂に解かれ得ざるものとなるであらう。（大正一〇、六、一〇）

本論は左の論文著書に負ふ處多い。

西田教授意識の問題の中なる「關係に就いて」

Windelband, Von System der Kategorien 1900.

A. Meinong, Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie 〇中々〇 An sieder, Mally 〇論文〇

Olivier Hazy, Die Struktur des logischen Gegenstand s 1915.

II. Ulrich, System der Logik 1852.

Hegel, Logik in der Encyclopädie.